

幻を見たとき

使徒の働き 16章 6-10節

はじめに

今日は、さがみのキリスト教会の創立二十九周年記念礼拝です。

人間で言えば、二十九歳と言えば立派な大人です。社会人として働いて数年経ち、仕事にも慣れて来る年齢であり、結婚して家庭を築き始める人も多い年齢と言えます。しかしまだ若さがあり、青年と言える年齢ではないでしょうか。将来の夢やヴィジョンに向かって奮闘し、希望と活気に満ちている時期だと思います。

私自身について言えば、ちょうど二十九歳の時に神学校に入学しました。すでに教会の伝道師や大学生伝道をしていましたが、自分の未熟さを痛感し、学び直す決意をしたのです。すでに結婚して家庭を持っていましたが、もう一度、伝道者としてやり直そうと考えたのです。二十九歳はまだやり直しができる年齢です。まだまだ生涯の道が定まらない、様々に模索し、チャレンジできる年齢とも言えるのではないのでしょうか。

さがみのキリスト教会も来年で三十周年を迎えます。まだ若さがある教会であり、様々に模索しながらも希望と活気に満ちている時期かもしれません。また新たなことにチャレンジできる教会でもあるかもしれません。今はコロナ禍の中で、様々な活動も制限されていますが、やがて新たな道が開かれていくのではないのでしょうか。

今日の聖書箇所には、使徒パウロの第二次伝道旅行の始まりの様子が書かれています。この第二次伝道旅行によって、福音がヨーロッパへと広がっていくことになります。キリスト教は、古代、中世、近代とヨーロッパが中心となっていきます。その意味で、このパウロの第二次伝道旅行は、歴史の大きな転換点であったと言えます。ではなぜパウロは、ヨーロッパに福音を広げるようになったのでしょうか。今日は、その「きっかけ」について学びたいと思います。

1. 閉ざされた計画

パウロは、第一次伝道旅行の時、バルナバと一緒に「キプロス」や「ガラテヤ地方」を中心に伝道しました。しかし、第一次伝道旅行を終えて、第二次伝道旅行に出発する時に、バルナバと激しい議論となり、互いに別行動をとることになったのです。

その議論の原因は、第一次伝道旅行の途中で離脱したマルコを、第二次伝道旅行でも一緒に連れて行くかどうかというものでした。バルナバは一緒に連れて行こうとしましたけれども、パウロは反対したのです。その議論が激しくなり、結局パウロとバルナバは、別行動で伝道することになったのです。

バルナバはマルコを連れて「キプロス」へ向かい、パウロはシラスを連れて「ガラテヤ地方」へと向かっていくのです。そしてパウロは途中で、テモテという弟子を仲間に加え、パウロ、シラス、テモテの三人でアジアを目指し、特に「アジア」の大都市「エペソ」を目指して第二次伝道旅行を始めていくのです。

しかし今日の聖書箇所6節には、こうあります。「**それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤ地方を通過して行った**」。パウロたちは、「アジア」の大都市「エペソ」で伝道しようとしたのですが、「聖霊によって禁じられた」というのです。聖霊が具体的にどのように禁じたのか分かりませんが、とにかく「アジア」の大都市「エペソ」で伝道する道は閉ざされてしまったのです。

そこで仕方なくパウロたちは方向転換をし、「ビティニア地方」で伝道しようと考えたのです。しかし7節にはこうあります。「**こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許さなかった**」。パウロたちは、「アジア」に続き、「ビティニア地方」でも伝道する道が閉ざされてしまったのです。ここでも「イエスの御霊がそれを許さなかった」とだけあり、具体的にどのように道が閉ざされたのかは分かりません。そこでパウロたちは仕方なく、「トロアス」という港町まで旅を続けることにしたのです。

地図で見ると分かりますが、この旅路は長い道のりでした。彼らがこの旅路の間、伝道したとは書いてありませんから、おそらく彼らは伝道することなく、ただひたすら長い道のりを歩き続けたのでしょう。伝道したい彼らにとって、この長い道のりは辛く厳しいものだったに違いありません。伝道したいのに、ことごとく道が閉ざされる、伝道したいのにただひたすら何もできないまま時間だけが過ぎていく、「自分たちは何をやっているのか」と焦りや空しさもあったかもしれません。パウロにとっては、バルナバと議論して別行動をとったのが間違えだったのではないかと、そんな思いもあったかも知れません。

私たちも人生の中で、パウロたちと同じような経験をするのではないのでしょうか。自分の願う道、計画がことごとく閉ざされてしまう、就職や進学をはじめ、人生のあらゆる場面で道が開かれない、道がことごとく閉ざされていく、そういう経験の一つや二つ、私たちの人生にはあるのではないのでしょうか。そのような中で、焦りや不安、苛立ちを覚えることもしばしばです。神様の摂理を信じている私たちだからこそ、「神様がなぜこんなことをするのか」と信仰が揺さぶられることもあります。

パウロも私たちと同じような経験をしたのです。パウロだって、神様の御心がすべて分かっていたわけではありません。なぜか分からないけれども道が閉ざされる、この先どうしたらよいのか分からずに途方に暮れることもあったのです。

2. 開かれた道

しかし9-10節を見ると、パウロは「トロアス」で一つの幻を見るのです。そしてその幻をきっかけに、新しい道、ヨーロッパへの伝道の道が開かれていくのです。「**その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、『マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください』と**

懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。

パウロが見た幻は、一人のマケドニア人が助けを求める幻でした。この幻は、イエス様ご自身が直接語っている幻ではなく、一人のマケドニア人が語っている幻でした。今まで「アジア」や「ビティニア地方」での伝道の道が閉ざされた時は、「聖霊」または「主の御霊」によって道を閉ざされました。しかし今回は、聖霊やイエス様による言葉ではなく、一人のマケドニア人の言葉でした。

この一人のマケドニア人の幻を見た時、パウロたちは、「ただちにマケドニアに渡ることにした」のです。なぜならマケドニア人たちに伝道するために、神様が自分たちを召していると確信したからです。パウロたちは、一人のマケドニア人の幻を見た時、聖霊やイエス様からの直接の言葉ではなかったけれども、この幻が神様からのものだと「確信した」のです。

この「確信した」という言葉は、「いっしょに結び合わす」という意味の言葉で、色々な証拠から一つの結論を出すことを意味します。彼らは決して、この幻だけで神様の導きを確認したわけではありません。またパウロひとりが、この幻を神様の導きだと判断したのでもありません。彼らは、「私たちはただちにマケドニアに渡ることにした」とあります。つまり彼らはみんなで話し合ったのです。この時、「使徒の働き」の著者であるルカも、第二次伝道旅行に加わったと言われていますが、パウロ、シラス、テモテ、ルカの四人で話し合ったのです。そしてこの幻だけでなく、今までの色々な出来事も思い出しながら、つまり「アジア」や「ビティニア地方」での伝道が閉ざされたことなどを考えながら、四人で話し合いながら、これは神様が私たちをマケドニア、つまりヨーロッパに導いていると確信したのです。なぜ今まで「アジア」や「ビティニア地方」での伝道が閉ざされたのか、それは神様が私たちをマケドニアに導き、ヨーロッパに福音を広めるためだったのだと確信したのです。つまり新しい道を開くためにこそ、神様は他の道を閉ざされたのだと確信したのです。

パウロたちは、聖霊やイエス様から直接、こういう理由で道を閉ざしたと聞いたわけではありません。また彼らは、聖霊やイエス様から直接、マケドニアに行きなさいと聞いたわけではありません。ただ彼らは、パウロが見た幻をきっかけに、今までの出来事を思い出しながら、四人で話し合い、総合的に、また理性的に神様の導きを判断したのです。そして最終的には、その判断を神様の導きと信じて、海を渡ったのです。その結果、ヨーロッパに福音が広まり、何世紀にもわたって、キリスト教の中心地となっていきます。

おわりに

神様の御心には、ある意味で二種類あります。一つは、私たちに現わされた「御心」と私たちに隠された「御心」です。私たちに現わされた「御心」とは、聖書の御言葉です。神様は、私たちが知るべき「御心」をすべて、聖書の中に書き記されました。

しかし私たちには、隠された「御心」もあります。例えば、どの会社に就職するとか、どの学校に進学するとか、誰と結婚するとか、そういう一人ひとりの人生の具体的なことは、

聖書に書かれていません。ですから私たちは迷ったり、悩んだりしながら決断をしていくのです。

パウロたちが第二次伝道旅行で、どの地域に伝道するかは隠された「御心」であったのかもしれませんが。彼らはただ、「地の果てにまで、イエス様の証人となる」という現わされた「御心」に従っていただけでした。そのような中で、迷ったり悩んであり、考えたり話し合ったりしながら、神様の「御心」と導きを総合的に、理性的に判断し、最終的には信仰に立って決断していったのです。

私たちの人生にも、様々な決断が迫られる時があります。また願っていた道が閉ざされる時もあります。その時に私たちは、神様の「御心」と導きはどこにあるのかを求めていかなければなりません。今日の聖書箇所で教えられることの一つは、私たちの道が閉ざされる時は、新たな道が開かれる時であるということです。神様は、私たちを新たな道に導くために、時には私たちの願う道を閉ざされる時があるのです。旧約聖書の箴言 16：21 には、こうあります。「人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する」。私たちは、「トロアス」に到着した時のパウロたちのように、ことごとく道が閉ざされて、途方に暮れることもあるかもしれませんが。しかし私たちは、閉ざされた時こそ、新しい道が開かれる時だと希望を持つことが大切です。

今日の聖書箇所で教えられるもう一つのことは、私たちが隠された神様の「御心」や導きを求める時、総合的に、理性的に判断し、最終的に信仰に立っていくということです。パウロたちはいつも超自然的な導きに従っていたわけではありません。彼らは、現わされた「御心」に従いながら、祈りつつ、そして様々な出来事に暗示されている神様の御心を読み取り、一人ではなく、他の人と話し合いながら、総合的に、理性的に判断し、決断していったのです。そして最終的には、それこそが神様の「御心」であると信じて一歩を踏み出していったのです。

私たちも様々な選択や決断が迫られる時、まず現わされた「御心」、つまり聖書の御言葉に従うことが大事です。それと共にもちろん祈りつつ導きを求めることも大切です。また自分の道が閉ざされているか、開かれているかの状況をよく見極めることが大切です。そして自分一人で決めるのではなく、他の人の意見を聞き、相談しながら考えることも大切です。これらのことを総合的に、理性的に判断し、最終的に信仰に立って決断していかなければなりません。

ローマ 8：28 には、こうあります。「**神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています**」。私たちがもし神様を愛しているなら、つまり現わされた「御心」、聖書の御言葉に従って歩んでいるなら、必ず神様が道を開いてくださいます。たとえ自分の願っていた道がことごとく閉ざされたとしても、その閉ざされた道にも意味があったと思えるような新しい最善の道へと導いてくださるはずで

さがみのキリスト教会も二十九周年を迎えました。今は、コロナ禍の中で様々な活動が制

限されています。あらゆる活動を休止しなければならないような状況です。しかし私たちがもし神様を愛し、現わされた「御心」である聖書の御言葉に従っていくなら、このコロナ禍の状況も意味があったと思えるような新しい最善の道へと導かれていくはずです。

この閉ざされた道の中で、新たな道が開かれる希望を信じて歩んでいきたいと思えます。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは永遠の昔から御計画を持っておられ、その御計画に従って今も私たちを導いておられます。あなたは私たちに聖書を与え、あなたの御計画と御心の一部を私たちに教えてください。しかし私たちには隠されたあなたの「御心」もあり、私たちの願いとあなたの「御心」が異なる時、私たちは途方に暮れてしまいます。

しかしあなたは、あなたを愛し従う私たちを特別に扱い、すべてのことを益とし、いつも最善に導いてくださいます。すべてのことには意味があったと思える、最善の道がいつも私たちに用意されていることを信じさせてください。またあなたの隠された「御心」と導きを求めていく時に、御言葉と祈り、知恵と交わり、また信仰によって総合的に、理性的に判断していく力をお与えください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。